

早産とその臨床型に関する疫学研究

Epidemiology of preterm birth and its clinical subtypes

CANDE V. ANANTH¹ & ANTHONY M. VINTZILEOS

The Journal of Maternal-Fetal and Neonatal Medicine, December 2006; 19(12): 773–782

抄録（仮訳）

米国の全出産の 12.5%は早産（<37 週）となり、早産は周産期の死亡と異常の最大の原因であり、周産期死亡の 75%を占めている。最近の短期的な早産の増加にもかかわらず、未熟性の問題を解明する努力は実を結んでいない。これはもしかすると、病因における不均一性や、自然陣痛の発来、分娩時期前の早期破水、もしくは医学的適応に基づく早産など、発端となる臨床的な症候が十分に重んじられてこなかったことによるのかもしれない。この論文で我々は、早産の発生率、短期的な動向、再発に焦点をあててデータを吟味する。米国の出生に関する調査においては、最近の短期的な全早産率の増加には医学的適応に基づく早産の顕著な増加が付随し、前者は後者によって押し上げられている。しかしながら、短期的な周産期死亡率の低下もまた、他の臨床型との比較においては主に医学的適応に基づく早産の中で起こっており、分娩時期の手前で産科的介入を行うことが周産期死亡を減少させているのである。最近の知見によれば、自然の経過による早産は自然早産の反復のみならず医学的適応に基づく早産と関連し、その逆もまた成り立つ。これにより、異なる臨床型には共通の病因が横たわっていることが示唆される。医学的な適応に基づく早産は早産全体の 40%に達し、このような介入に至る理由や新生児への短-長期的な影響を解明する努力が不可欠である。今後さらに早産の病因や仕組みを明らかにするための研究が必要である。それによって、効果的な予防と治療の戦略が可能となるであろう。